生き生きと輝く学校　　たのしさいっぱい！ちからいっぱい！はないっぱい！

令和６年１０月１日

立入が丘小学校だより

酷暑から地球温暖化問題を考える

2学期が始まって早1ヶ月が経ちました。10 月を迎え暑さもようやく一段落を迎えたように思いますが、先々週までは熱中症の危険度を示す暑さ指数が「危険」レベルで、屋外での学習や遊びが行えない状態でした。暑さ指数とともに測定する周辺温度も昼休み前には 39.4 度を示した日があり（天気予報などでの気温とは測定方法が違いますが、体感温度に近い数値だと思います）、まさに身の危険を感じる暑さでした。夏が暑いのは当たり前ですが、外遊びを禁止することは今までなかったですし、9 月下旬に猛暑日を記録することもありませんでした（猛暑日【最高気温が 35 度以上】の言葉が誕生したのが 2007 年なので昔は想定していなかったのだと思います）。また、集中豪雨も各地で発生し、最高気温、降水量ともに観測史上最高を記録する地点が増えてきています。

私は、これらの気候変動を見るに付け、地球が悲鳴を上げているのではないかと心配しています。人間が便利さを手に入れるために身勝手な開発を続けてきたことへのしっぺ返しではないかと思っています。日本で地球温暖化がクローズアップされてきたのは、1992 年、12 歳のセヴァン・カリス＝スズキさんが、リオデジャネイロ地球サミットの演壇から、環境保護のための行動を起こすよう各国首脳に呼びかけたあたりからではなかったでしょうか。1997 年には、京都市で開かれた COP3（気候変動枠組条約第 3 回締約国会議）で京都議定書が採択され、省エネや 3R 活動などが盛んに言われるようになりました。04 年に環境分野で初のノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんが提唱した「MOTTAINAI」も大きな話題となりました。

現在では企業が環境問題に取り組むことは必須となり、脱炭素化に向けた取組は進んでいますが、一般生活では以前ほど言われなくなったように思います。しかし、昨今の異常気象を見ても、これは他人任せにして良い問題ではありません。地球の未来について自分事として考え、自分たちにできることをしていく。子どもたちにはそうあってほしいと思います。学校での子どもたちの様子を見ていると、昼休みにごみ拾いを頑張ってくれる子どもたちがいます。しかし、トイレの電気の消し忘れや、日中に必要の無い階段や廊下の蛍光灯が点いていることも度々です。給食の残飯も毎日出ています。今こそ、日々の生活を見直し、「もったいない」精神に立ち返り、エネルギーや環境問題に対して無駄のない生活を心がけなければならないと思います（守山市では 2050 年に温室効果ガス排出量ゼロの実現を目指しています）。

『成瀬は天下を取りにいく』続報

前回の学校だよりで紹介した表題の書籍について、学校司書によると子どもたちに人気があり、書棚に並ぶことなく次の児童が借りていく状況だそうです。因みに守山市立図書館では 13 冊の蔵書がありますが、9 月29日現在 421 人の予約が入っているそうです。成瀬人気恐るべしです。

この書籍の続編『成瀬は信じた道をいく』の中に主人公の発した興味深い一文がありました。「何になるかより、何をやるかのほうが大事だと思っている」

就きたい職業より、今、自分がしたいこと（主人公の思いは地域に貢献したい、人の役に立ちたい）があり、その実現のために行動することが大事だということです。子どもたちも日常をこんな視点で考えられたらいいなと思いました。